

福祉系

対人援助職養成の

現場から^{⑤⑩}

西川 友理

2020年度の実習先確保について

2019年末、中国で報告された原因不明の肺炎が新型コロナウイルス感染症と名付けられ、2020年の2月～3月頃には日本でも生活に大きな影響が出てきました。職場も学校も、どのような対応をすればいいかわからず、とにかく手探りで右往左往。保育所や福祉施設も出入りの人を制限することが増えました。利用者や入所者と、その家族との面会・外泊も、かなり制限されました。

そんな中で、養成校から実習生を受け入れてほしい、と言われても、現場としては、施設内の衛生環境を守るために、出来れば受け入れたくないというところも多くありました。

ですから、2020年度の実習先確保は、どの養成校も苦労をしました。多くの実習先が「このような状況なので、実習の受け入れはしばらく見送らせてください」とおっしゃいます。それは意地悪でもなんでもなく、施設の入所者・利用者の健康を守らなければならない、さらには万が一施設内で感染症が流行った時に、実習生に感染させるなどということが起こってはいけない、という安全管理上、当然の判断をされたということです。利用者の方と実習生、お互いのことを思って、苦渋の決断で「本当にごめんなさい…!」と言って断ってこられたところも少なくはありませんでした。

また、この考え方は養成校の方にもありました。厚生労働省からは、「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う指定保育士養成施設の対応について」という通知がでまし

た。

これを見ると「…実状を踏まえ実習に代えて演習又は学内実習等を実施することにより、必要な知識及び技能を修得することとして差し支えない…」とあります。

「そりゃもちろん、学生に現場を見てきてほしいけど、養成校として、現場に迷惑をかけることは絶対に出来ないよ！」

そういった考えから、早々に学内実習のプログラムを作成し、養成校が自ら、学内演習に切り替えたというケースも見られました。

ところが、その影響は半年も経てば思わぬ形でやってきました。10月～12月頃、コロナを理由に、実習を断った実習先の多くが

「実習生に声をかけることも出来なかった。就職フェアも取りやめになった。人材確保に向けての動きが何も来ていないのです…人材確保が出来ません。だれか、うちに就職したいという学生はいませんか？」とおっしゃり、時には毎日のようにそのような園や施設からの電話を受けるようになりました。

そうか、実習って現場の人材確保にこんなに大きな影響を与えるものなのか…。園や施設、さらには養成校も、この事態を重く受け止めました。

2022年度の実習先確保について

そんな2020年度を経て、2021年度、そして2022年度。いわゆる「新しい生活様式」を併用しながら、実習も何とか実施

出来、就職フェアもオンライン開催やハイブリッド開催が行われるようになっていきます。もちろん感染症対策には細心の配慮を持って、万が一感染者が出た場合の対応も、大体のセオリーが出来てきました。

学生による実習依頼電話

実習をする際、どの現場で実習をさせていただくか。これは、学生が自分で実習したい現場に連絡をとって開拓していく場合と、学校が契約している実習先に養成校が学生を配属する場合があります。以下は、実習先を自分で開拓することになっている、ある保育士養成校で、2022年に見聞きした話です。

どの学生も、実習をお願いする電話はとても緊張します。携帯電話が普及した昨今、大人の人に公の電話をかけること自体が、ほぼ人生で初めてという学生も珍しくありません。緊張しすぎて半泣きの学生もいます。

「断られたり、叱られたりしたら、どうしたらいいのかわかんないです…めっちゃメンタルやられる…！」

「大丈夫、どうしても事情があってムリ、という所はそんなにないから」

「いやもう、電話すること自体が怖くて怖くて！！」

「うん、あのね、学生が自分で開拓する養成校もあるってことは、園側も知っているから、普通に礼儀正しくさえしていれば…。そうね、まるであなたが3歳の頃に初めて電話した、田舎のおばあちゃんくらいの、おおらかーな気持ちで、先方は見守ってく

ださるから。」

と滅茶苦茶な取り乱し方をする学生に、滅茶苦茶な励まし方をして電話を促します。

そして、当然ながら怖いことなどまずめったに起こらず、「せんせーい、受け入れてもらえました！」「向こうの人、めっちゃ優しかった！」とケロツとして報告してきます。そうでしょう、よかったよかった。

なにせ保育や幼児教育の現場は、あと数年は人材不足が続くと言われていています（逆にあと数年で状況は変わると言われていますが、これについてはまたの機会にお伝えしたいと思います）。実習が就職に強く結びつくということを思い知らされた私達です。何か先方に事情がない限り（そして過去にその養成校に大きな落ち度がない限り）そうそう実習を断られることはない、というのは予想がつかます。

なかなか実習先が見つからない！

ところが、このご時勢でもなかなか実習先が確保できない学生がいます。

「その時期、実習生はたくさん受け入れてしまっているから、もう受け付けていないと言われました」

「検討します、と言われて1週間待ったのですが、やはり難しいと言われました」

「今はコロナの影響もあって、実習生を受け入れてないと言われました」

しょんぼり落ち込む学生の肩をたたき、よし次！頑張ろう！と励まします。緊張する依頼電話にも慣れてきたころ、3 か所目、

4 か所目でやっと実習先を確保できてうれしそうな学生たち。それらは、どんな学生でしょう。

実は、男子学生なのです。

もちろん、男子学生でも1回目の依頼で受け入れてもらえることもあれば、女子学生が断られることも1回や2回はあります。断られた園の中には、本当に実習生が沢山いるので、この時期はやめてほしい、という園もあります。しかし、3園、4園に断られた学生を見ると、見事に男子学生がそろっています。こうなると、

「…男子学生は、就職に繋がらないと思ってるんじゃないの…？」

「…男子を就職させる気がない園は、実習させる気もないんじゃないの…？」

「…というか、男子の就職って、いまだに拒否されるものなの…？」

と、邪推とは思いながらも邪推してしまいます。学生自身も、肩を落とします。

「やっぱり男子って、保育現場ではなかなか受け入れてもらえないんですかね…」

「やっぱり男子って

受け入れてもらえないんですか？」

という話を、現場の男性保育士にしてみました。

「いや〜〜わかる！俺もそうだったもん」

「でも、僕が務めているところはそんなことないよ、法人内に男子会があるもの」

「男子会、すごい！あ、でも俺のところも

めっちゃ働きやすいし、男子の実習生もたまに来ますよ」

それを聞いて私は思わず、うちの男子学生、あなたの所で実習させて！と予約をしてしまいたくなります。

男性保育者が

働きやすい現場、働きにくい現場

ちょうど2年前、対人援助学マガジンの42号に、現場の男性保育士が、性別役割分業にとらわれる保育現場の中で、生きづらさを感じていることについて書きました。令和二年度の保育現場での男性比率は約4%。保育現場では超少数派の男性保育士です。

しかし、2年前の記事にも書きましたが、上記のように男性保育士が働きやすい園と、働きにくい園があり、その差が広がっているように感じています。

こんなに男女格差について言及されている社会において、性別役割分業が根強く残る現場もあるということです。ではその両者の違いはどこにあるのでしょうか。

それは、実際に男性保育者を受け入れた園と受け入れていない園ではないかと感じています。

過去の研究から

2000年頃の研究で、男性保育者が実際にいる園よりいない園の保護者のほうが

「ダイナミックな遊びや工作などを男性ならではの役割を男性保育者に期待する」という傾向があり、さらには「乳児保育には男性保育者には適さないと考える」という傾向があるという指摘がありました。同じ研究で、男性保育者がいる園の保護者の方が「男性の保育者の存在に肯定的」といった結果が出ています¹⁾。つまり、実際に男性保育者に接した保護者の方が、性別役割分業にとらわれずに男性保育者を認識しやすい傾向にあるということです。これは保護者だけでなく、男性保育者と働く同僚の女性保育者の中にもそのような傾向が見られます。同じ頃の研究で、男性保育者と働いた経験のある女性保育者の方が、経験のない女性保育者よりも男性保育者の低年齢児担当を積極的に認めているという研究があるのです²⁾。

21世紀に入った前後、性別役割分業に基づく考え方はまだまだ色濃くのこっているものの、少しずつ、性別にとらわれない「保育者としての資質」そのものを問う傾向が出てきたのではないかと考えられます。

それから20年が経過しましたが、先述したように、男性保育者は全保育者のうちのまだ4%に過ぎません。現在においても男性保育者を受け入れたことがない園もまだまだあります。男性保育者を受け入れたことがある園とない園とでは、その格差がどんどん広がっているのではないかと考えられます。

さらに、一歩踏み込んだ研究が。

さらに近年の研究では、また面白い傾向

があります。

20年ほど前の男性保育者に関する研究では、最終的に性別役割分業にとらわれず、「その人そのもの」「保育者としての専門性そのもの」が大切、という結論になるものが多かったのですが、近年の論文の中には、「そもそも、男性保育者って女性保育者とどう違うの？」という「違い」に着目したものが見られるのです。それらはいずれも「男性性のみに着目することの危険性（男性に対する性別役割の押し付け等）」を認識し、それについての配慮を踏まえた上で、男性保育者による保育の特徴について示した研究論文となっています。

例えば山中らの2021年の研究では、鬼ごっこにおいて、女性保育者よりも男性保育者の方が実際の運動量は少ないにもかかわらず、男児の活動を促進していたという結果を提示しています。平たく言うと、男性保育者相手の鬼ごっこの場合、男性保育者が走り回ってなくても、そこにいてだけで、女性保育者の時よりも、男の子がはしゃぎまわることが多い、ということ³⁾。

中澤らは、男性保育者は女性保育者よりもユーモア行動を多く用い、特に攻撃的なユーモアを身体的に表出することが多かったとしています。そのユーモア行動は、幼児が失敗をしたり、困ってしまったというネガティブな事象が起こった時に、それらの軽減・解決を促進するために用いられていることを見出しました⁴⁾。

また、これらの論文にはもう一つ特徴があります。昔の男性保育者についての研究の多くは「どう思うか」「どう感じるか」「どうあってほしいか」という「意識」を調べたものが多かったのですが、近年の研究で

は実際に数量的なものの計測、保育場面で実際に起こった事例など「事実」や「数値」等をもとにした研究したものが散見されるようになっています。これは単純に男性保育者が保育現場に一定数増加したことで、実際の行動や事実をデータとして量的に把握することが可能になったためではないかと考えられます。

性別に関わらず一律に保育者の専門性を大切にすることは、一見とてもいいことのように思いますが、男性保育者に対して無意識な同化型差別（同じ保育士なんだから、性別に関わらずに女の人と同じようにやってよ！というような差別）を引き起こすという可能性も考えられます。それを考えれば、むしろ男性と女性の違いについて、データを事実として明確に把握することで、お互いの特徴が明確になり、それぞれ良いところを生かし、より豊かな保育現場を構築できるともいえるかと思えます。

そして、性的少数者もいます。

もう一つ、私が注目していることがあります。性的少数者の学生です。学年で1人や2人くらいは性的少数者の学生がいるということは、どの養成校でももうほとんど当たり前になっています。統計的に考えてみれば、各地の幼稚園や保育園、様々な社会福祉の場にも、性的少数者の人がいるのが普通です。

実習生や勤務者だけではありません。岡山大学大学院で行われた性同一性障害の患者を対象とした調査では、性同一性障害の約56.6%の人が、性別違和感を持ち始めた

時期が小学校入学前であると答えています⁵⁾。

保育における男性性がどうだ女性性がこうだという議論をするその先に、性的少数者の子どもと職員に対して、園がどういう姿勢でいるのかということも話題に上がります。

保育現場におけるジェンダー

5～6年ほど前、『幼児の性自認』という本が出版され、保育業界ではちょっとした話題になりました⁶⁾。幼児の現場は特に性別による区別がない、と考えられていたのですが、この本は幼児教育や保育の現場で子どもたちが自分の性自認（自分は男の子である、女の子である、という認識をもつこと）を形成するにあたり、様々に影響を与える事象があることを明らかにしたものです。

ひなまつりやこどもの日など、日本の伝統行事はジェンダーに関わるものも多くあります。子どもたちに文化を伝えるのもまた、保育の場の大事な役割です。では、さてジェンダーの視点から見た時に、何をどのように伝えていく工夫が必要でしょうか。そのような配慮は不要なのでしょうか。

ジェンダーに関する話は、保育現場の子どもと職員に直結する話です。現場にいる保育者がどう考え、どう振るまい、どのように周囲とコミュニケーションをとるのか、普段のかかわりが子どもたちに直接影響します。

「性の話は 生の話」という言葉があります。保育現場におけるジェンダーのあり方については、養成校の教員として、今後もお付き合いしていきたい、学生と共に考えていきたいトピックなのです。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

1) 鈴木弘光・斎藤政子・木下博美「男性保育者に対する調査研究(3) 保護者を対象とした意識調査から」『湘北紀要』21 巻, pp.35-45, 湖北短期大学 2000 年

2) 中田 奈月「男性保育士による低年齢児保育の困難」

『保育士養成研究』第 21 巻 pp.19-27
全国保育士養成協議会『保育士養成研究』
編集委員会 編 2003 年

3) 山中拓真 本多舞「男性保育者は幼児をより活動的にするのか?～保育者と幼児の性別の組み合わせが幼児の身体活動に与える効果の検証」『保育学研究』59 巻1号, pp.45-56, 2021 年 日本保育学会

4) 中澤潤 中道圭人 永井保「男性保育者のユーモア行動に関する仮説の生成と検証千葉大学教育学部研究紀要 55 巻 pp.71-77

千葉大学教育学部 2007 年

5) 中塚幹也「性同一性障害と思春期 (第 31 回小児保健セミナー 思春期と性の問題をめぐって)」『小児保健研究』75 巻 2 号

pp154-160 2016 年

6) 大滝世津子『幼児の性自認—幼稚園児はどうやって性別に出会うのか』みらい 2016 年